



TITLE:

シュトルムの世界観

AUTHOR(S):

田川, 基三

CITATION:

田川, 基三. シュトルムの世界観. 独逸文學研究 1957, 6: 16-35

ISSUE DATE:

1957-12-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186263>

RIGHT:

シュトルムの世界觀

田 川 基 三

シュトルムはある手紙のなかで、自分の性情が植物的であるという意味のことを述べている。たしかにシュトルムという作家を形容する言葉としては、動物的という言葉はあたらす、植物的というのが最もふさわしいように思われる。自然にたいする愛情、郷土とのつながり、繊細な神経と異常な敏感さ、積極的行動性の缺除などは、いずれも彼の植物性を裏書するものと考えられるが、作家として人間としての彼の成長のさまが、これまた植物的である。

彼の成長發展のあとを眺めてみるならば、さしたる外的波瀾もなく、精神的危機もなく、比較的ならかに直線的に進展し、きわめて徐々にではあるが堅實な歩みをつづけ、彼の生れながらの資質が年とともに成長發展して、ますます純粹の度をくわえ、晩年にいたって彼の生活も創作もその頂點に達しているように思われる。フォンターネが自分の父親について述べた言葉をそのまま借りて言えば「最後に到りついた姿がもっとも本來的な姿であった」(Fontane: Meine Kinderjahre) ような作家である。

つまり、彼の精神的發展は、生れながらの資質がそのまま純粹内面的に成長した、と云うことが出来るかもしれぬ。またこの點から、彼の精神の狭さと攝取力の弱さがしばしば指摘され、他の作家たちに比較して問題性の稀薄さが非難されるが、“Problematic” が精神生活の特徴とみなされた當時にあっては、このような傾向はたしかに缺點と言

わねばならない。しかし、その反面において彼のもっている本質的な健康さと純粹さを見逃してはならないであろう。

シュトルムの物の考え方はまったく直観的であって、およそ論理的思索や組織的思考は彼の不得手とするところであつた。また、どんなにすぐれた思想でも研究結果でも、それが他人のものであるかぎり、彼は自己の人格形成のための素材としてしかその價值を認めなかつた。そして、それが自分にふさわしくない知識であれば、彼はそれをしりぞけて顧みなかつた。つまり、すべての精神的成長はシュトルムにとっては自己形成であり、おのれの内的價值の促進を意味したのである。

シュトルムは十九世紀の學問技術の發達にもほとんど注意を向けることなく、偉大なドイツ哲學にも心をひかれなかつた。ケラーはフォイエルバハの影響をうけたし、ラーベはショーペンハウエルの影響をこうむっているけれどもシュトルムはヘーゲルの哲學にも、シェリングやショーペンハウエルの思想にも關心をよせることがなかつた。彼ほど當時の一般的思想に無關心におのれの道を歩んだ詩人はすくないように思われる。

シュトルムのいづく世界觀は、ひとつの精神的世界像への要求から生れたものではなく、彼のおかれた現實的立場から生じたものである。いわば生活からえられた確信である。それは、ながい精神的な闘いによつて決定されたものではなく、彼の本質の奥底からつよい確信をもつて答えられたものである。それは、ひとつの組織だつた世界觀ではないために、その根本的態度は不變であつても、その都度ちがつた現れ方をして、ときに明確さを缺き矛盾にみちたものであるから、秩序ある體系をそれにあたえたり、明確な方式をそこから引きだしたりすることはもとより不可能なことである。

しかし、シュトルムの思想をこまかく觀察してみるならば、そこには相反する二つの面が認められる。第一は自然のなかに首尾一貫した合理的な因果關係の存在を認めようとする考え方であり、第二はフリースランド人に特有な、幽

靈や豫感や千里眼のような靈界の神秘的現象にひかれる面である。

シュトルムの友人であった社會學者の Tönies は次のように語っている。「シュトルムは、これまでも好んでわたと神秘的な事柄について話しをした。シュトルムはまったく自由思想家で、原則的には科學的認識のうえにたっていた。しかし妖怪變化のたぐいや、幽靈や迷信などは彼にとって、彼の十分意識していた詩的魅力をもっていたばかりでなく、彼はまたそのような物語や空想のなかに、ときおりそのかくれた存在を示したがる未だ知られざる靈魂の力が存在する、という考え方に傾いていた。彼はしばしばわたしに、科學がいつかその謎を解いてくれるにちがない、という期待を語った。」(Ferdinand Tönies: Theodor Storm zum 14. September 1917. Gedenkblätter. Stuckert による)

こういう點からシュトルムを神秘主義者とみなしたり、あるいはまたローマン主義の影響を考えたりする者があるが、それは一面的な見方であって正しいとは言えない。これはシュトルムの思想が、合理主義的な面と同時に、非合理主義的な面をそなえている事實を物語るもので、このことは彼の作品においても認められる特徴である。このようにシュトルムが非合理的、神秘的精神世界に心をひかれたということが、當時の機械論的、唯物論的思想に輕々しくおちいることから、彼をまもったとも考えられる。結局、彼の世界観は Stuckert の言葉をかりて言えば、感情的色彩と審美的傾向を多分にもつ汎神論(Pantheismus)にいちばん近いと言いうるであらう。しかし、これがゲーテやシェリングのそれとなんの關係もないことは言うまでもない。とにかくそれは生の悦びと美の讚美にささえられた内在的世界観である。

シュトルムのいだいた運命觀も、このような内在的世界觀にもとづくものである。この世における人間の卑小さと無價値さを知りはじめた彼は、人間には征服しえない強い神秘力の支配を認めるにいたった。この神秘的な力は自然

界のみならず、人間社會および歴史のなかにも支配している。このような力のなかから、われわれが運命とよぶところのものが生れてくる。しかし、彼の経験する運命なるものが、たとえどんなに底しれず、不気味なものであるにせよ、それは勝手氣ままに人間の生活のなかに入りこんで来る先驗的な、不可解なものではなくて、それは人間の行爲人間界のさまざまな出來事のなかに含まれているものである。人間の行爲がそれに参加しうるような運命である。古代のいわゆる宿命(Fatum)とか、ドイツの運命悲劇にみられるようなそれともちがう運命である。運命を狂暴な力とも、人間にたいする敵とも考へない。それは自然のなかに作用し、人間のなかにも法則的に作用するところのものである。

しかしながら、運命のはたらきをこのように原則的に説明することはたとえ出來るにしても、それが未來から人間にむかつて近づいてくるその不気味さと測りがたさに、やはり變りはない。そして運命のこのような不可避性が、シュトルムに一種のふかい恐怖感をあたえずにはおかなかった。

喜びも悲しみも、ひとしく運命の賜物なのであるが、たとえば古代における神々の嫉妬という考えのように、人間の幸福はたえず何ものかにおびやかされているのだ、という考え方がこの世のなかにはあるが、それは人間の幸福がすべて犠牲によってあがなわれねばならず、そういった性質上、かぎられたまことにはかないものである、という人生経験にもとづく考え方なのである。

こういうわけで、シュトルムは年とともに、神のなかにはなんらの慰めも保護も見いだしえない、という暗い運命觀におちいった。運命の力にたいしては、人はただ自分自身がよりどころである。運命にうち克つ力はおのれの内部にのみ存在する。人間がどのように運命に堪え、どのように運命に處するかは、その人自身の決定にゆだねられている。そして、運命にたいするこのような態度のなかにこそ、その人間の品位と價值とが示されるのだとシュトルムは考へた。

シュトルムの世界観にみられる現世主義も、さきにふれた内在的思想に由來するものであるが、これは彼の宗教觀の進展につれて徐々に得られた確信であつた。およそ來世にたいする希望をもたず、なんらの形而上的價值をもみとめない彼にとっては「生」が最高の價值をもつものとなつて來る。これはたんに彼の主觀的決意であるばかりでなく、また客觀的確信とも合致するものであつた。„Tiefe Schatten“と題する一連の詩と關連して愛妻コンスタンツェの死（一八五六年五月二〇日）の後で作られながら、彼の生前には發表されずに終つた詩のひとつで彼はこう歌っている。

Edel lebe und schön,

Ohne Hoffnung künftigen Seins

Und ohne Vergeltung.

Nur um der Schönheit des Lebens willen.

シュトルムにとっては生の美しさ、清らかさ、力強さが決定的な價值尺度となつてくる。そして、このような生の價值のなかに、いっさいの地上的幸福がふくまれているとみた。彼はとりわけ晩年の小説において、強く美しい人生の描寫におしみなく力を注いでいるが、反對にこのように美しく強くあるべき生の局限と破壊から、いっさいの不幸が生れるわけで、ここからまた生ははかない無常なものである、という人生觀の悲劇も生じてくるわけである。

この無常性の意識にたいして、シュトルムはただ徒らに抵抗を試みたにすぎない。というのも、彼の世界觀からしては、それを救う手だてはなかつたからである。それゆえ、シュトルムの世界觀には、その潑刺さと大膽さにもかかわらず、一種くらしい影があることは否めない。彼はけつしてベシシストではないが、その根本態度においては、それ

に近いところがないわけではない。これは十九世紀全體にみなざる、あの不氣味な世界觀的陰うつさと全く無關係ではないであろう。しかし、彼がペシミストたちと異なるところは、彼にみられる反抗精神 (Dennooh) のなかに、たえずあらわれる力強い絶對的な人生肯定である。たとえば、妻の死後間もなくメーリーケ宛にかいた手紙のなかにも次のような言葉がみられる「孤獨と解きがたい死の謎とは、わたしは今それを相手に靜かな、絶えまない戦いをはじめた恐ろしい二つのもののなのです。それでも、わたしは容易に屈服する男ではありません。……何故なら、わたしの前にあるのは仕事、仕事、仕事です！　そして、それをわたしは力の及ぶかぎりやり通さねばおきません。……」

(An Eduard Morike. 3. Juni, 1865)

シートルムはその一生を通じて宗教問題に心を勞した。外面的には、目だつた葛藤や破局や、まして改宗といったような事實は彼の場合にはなかつたけれども、宗教との精神的對決はたえずひそかに續けられて、時代とともにその考えも變つていった。

シートルムのキリスト教および教會にたいする、合理主義的なきびしい批判は、彼を唯物主義にもとづく無神論者か懷疑家であると思わせるかもしれないが、事實はそうではない。彼は型のごとき自由思想家ではない。彼はつよい信仰心をもつた宗教的探求者であつた。この宗教心が、たえず彼の理性および思想と對立し、その矛盾になやんだ。これはまさに、何ものかを信じたいがそれを信じることの出來ぬ、心ばえのふかい人たちの場合にみられる例であつてシートルムは宗教的思想と宗教的感情との矛盾對立になやんだが、このなやみは彼にあっては晩年の悲痛なあきらめにおいて解決された。彼の宗教觀はじつに複雑な様相ををいてゐる。たとえば若い頃、とりわけ婚約時代の彼は一人の神を意識し、靈魂の不滅を信じていたが、後にはそのような考え方をしりぞけるにいたつた。ゆえに彼の宗教觀は、後年はまったくそれからはなれてしまつたところのキリスト教を背景としてしか理解されない。彼の宗教的思想

および感情は、キリスト教の因襲的な信仰形式、教會制度への批判から出發するものである。また彼の成長した環境が、きわめて非宗教的とはいわぬまでも、宗教にたいしてすこぶる冷淡な雰圍氣のなかであつたことは事實である。當時の教養ある市民層をあまねく支配していたのは合理主義精神だつたからである。

シュトルムが、宗教問題を内的必然性をもって考えたのは、コンスタンツェとの戀愛體驗において、彼の世界観が形成確立されたときであつた。許婚への手紙のいたるところに、純粹素朴な神への信頼が述べられているが、その神はまったくキリスト教的な、やさしい愛の神である。しかし、これはどこまでも戀愛體驗との結びつきにおいてであり、愛を最後の宗教的深みにまで掘り下げたい欲求から出たことである。實際シュトルムは、この頃すでに教會にたいして鋭い批判を加え、自分たちの結婚に關しても、仲介者としての教會の役割を拒否している。

しかし、彼の宗教觀が決定的な形をとつたのは、ハイリゲンシュタット時代（一八五六—六四）以後のことである。彼はキリスト教教會にたいして、ますますつよい反感をいだくようになり、從來のキリスト教的色彩をおびた神および不滅性の信仰も變貌を來した。これにあづかつて力のあつたものは、ハイリゲンシュタットにおけるカトリック教の體驗と、自然科学の發達の結果生じた唯物論的思想の影響であろう。このようなキリスト教的批判が作品に描かれているのは小説 „Veronika“, „Im Schloss“ であり、その頂點をなすものは詩 „Ein Sterbender“, „Crucifixus“ である。

彼は一生涯キリスト教教會にそむき通した。彼は教會の諸行事、たとえば洗禮、堅信禮、婚禮、埋葬などを因襲にすぎぬと考え、ただ表面的にそれに従いはしたが、自分の葬式の際には斷乎として僧侶の參列を拒否している。シュトルムは救世主の出現や、來世にたいする期待を「死の恐怖が人間の頭のなかで考え出させた多彩なる幻想である」（„Ein Sterbender“）と言っている。とくにキリストの犠牲死の宗教的意義が彼には理解できず、十字架上のキリストの死をば生の神聖さを冒瀆する恐怖の圖とみたのである。

シュトルムは必ずしも神を汎神論的に自然のなかにとけこませようとしたのではない。しかし、神からいっさいの人格的なものをうばいさっているシュトルムにとっては、神とは、われわれ人間が敬虔な氣持をいだきつつ、温かくいだかれているより高い力というよりも、むしろ容赦されることなく身をゆだねさせられているもの、という感じがした。神は彼にとって、いよいよ非人格的なものとなり、運命にひとしいものとなった。

シュトルムは、さきに述べたように、婚約時代およびその後しばらくの間は、來世における靈魂の不滅をかく信じていた。これは、相愛の二人が永遠の結びつきをねがう氣持が生み出した考えであつた。しかし、彼は宗教觀の變遷につれてこの考えをすててしまった。このことはシュトルムにとって、まことに苦しいことであつた。後年、彼が愛妻コンスタンツェを失つたことは、彼にとってあまりにもいたましく、なぐさめられぬことであつたが、このときの絶望は、ほとんど彼をニヒリズムのきわまでおしやつたのである。妻の死を悲んで作られた詩“Tiefe Schatten”のなかの次の言葉はそのことを示している。

Markverzehrender Hauch der Sehnsucht,

Betäubende Hoffnung befällt mich;

Aber ich rafte mich auf,

Dir nach, dir nach;

Jeder Tag, jeder Schritt ist zu dir.

Doch, unerbittliches Licht dringt ein;

Und vor mir dehnt es sich,

Öde, voll Entsetzen der Einsamkeit;

Dort in der Ferne ahn ich den Abgrund;

Darin das Nichts. —

こうして死の謎はたえずシュトルムの心をとらえてはなさなかった。彼は若いころすでに死の謎を解こうと考えたのだったが、老年にいたって、死の問題は彼の思考の主要モチーフとなった。彼は、生命の消滅とともに個人の存在は終りを告げて、無(Nichts)がはじまるという認識に到達した。そして、死をおそれる氣持から、やがて心の落つきを見出して、ついには進んで死につく心境にたち至った。„Tiefe Schatten“のなかの次のような言葉はその心境を物語るものである。

Und am Ende der Qual alles Strebens

Ruhig erwart ich, was sie beschert,

Jene dunkelste Stunde des Lebens;

Denn die Vernichtung ist auch was wert.

シュトルムにとっては、死は人生の最後の試練なのであった。死はじつに壯嚴な生の反對力であり、それにたち向えば、生そのものも獨自の偉大さを發揮するようなものであった。彼の晩年の小説においては、死が救済として描かれている例はまれで、大抵の場合に、人間の自己完成の最後の表現として描かれている。つまり、ローマン的な死の讚美でなくて、死にうち克った人間、したがって生の勝利を祝っている場合が多い。

同様にシュトルムの小説には、新しい生命の出現、すなわち誕生がとくに意義おかいこととしてとりあげられている。とくに彼自身が悲しい経験をもっているところの、出生と死との直接的な結びつき、つまり出産と同時に母子が生命をうしなう例をくりかえし描いているが、彼にはそれが、生の有機的法則を最もふかく示すもののように思われたからである。また彼にとって最大の不幸と思われるのは、家系の断絶ということである。何故かという、それによって生命の流れが、最後の断ちきられると考えたからである。小説 „Renate“, „Bekenhof“, „Zur Chronik von Grieshaus“, „Der Schimmelreiter“, などはその例である。

シュトルムは愛の問題をどのように考えたであろうか。彼は小説 „Am Kamin“, のなかで「よくよく考えてみるならば、人間というものは、みな恐ろしい孤獨のなかに生きており、はてしない不可解な空間をさまようはかない一點にすぎない。われわれはそれを忘れている。しかし、時たま不可解な恐ろしい事柄に直面しては、突如としてこの感情におそわれる」と言っているが、初期のシュトルムは、よくこのような自我の喪失、存在の孤獨感におちいた。そこからの救いを神への信頼のなかに求めえなかった彼は、さしあたり Ich と Du との結びつき、すなわち男女の愛のなかにそれを求めた。小説 „Im Schloss“, のなかで、彼は「愛とは死すべき人間が孤獨にたいして抱く不安にすぎない」と言っている。彼の情熱は愛の感情においてのこりなく燃えたつたのである。彼にとって、愛は最高絶対の価値を占めるものであった。これを語る言葉は許婚への手紙の随所に見出される。「限りなく愛しようということとは、人間にあたえられた最大のもです」とか、「わたしたちの愛のなかにわたしはすべての幸福を感じます。たんにこの世においてばかりでなく、わたしがなおも存在しつづけるであろう未来永劫にわたって、それはわたしの最も神聖なものであり、わたしの一切です」などと言っている。戀愛觀のこのような宗教的ふかさは、彼の戀愛感情のはげしさと、ゆたかさを示すものである。彼は最高度に愛する能力をもっていたが、また愛される必要をも感じて

いた。彼は「わたしは他のものはみんななくしてもよろしいが、愛だけは溢れるばかりもたねばなりませぬ」(An Constanze)と言っている。彼はその現世的な考え方にもかかわらず、戀人との結びつきのなかに永劫持續を求めた。彼がキリスト教にたいして、すでに最もつよい反抗心をいだいていた頃に、妻のコンスタンツェにあてた手紙のなかで次のようにかいてある。「許されるならば未來の生活において、神が思いやりぶかけにわれわれを見おろされてゐる二人ははなれてはならぬ」といふ審判をお下しになるほど二人がひとつに結びつくことを、たとえ信じることは出来ぬにせよ、せめて一度なりと夢みることが許されるならよいのだけれど！」

彼の考えは、およそ超越的なものをすべて否定したけれども、愛においては絶對的なものの介入をゆるした。愛においてのみ永遠なものとの結合がゆるされた。いや愛そのものが神的なものの現われであつた。許婚への手紙に「考へてもごらん。愛はそのまま神なのです。信心です。いや愛はすでに宗教なのです」と言っているように、愛は宗教にまでたかめられたのであつた。

シュトルムのこれらの言葉は、諸家の説くように、ローマン主義との密接な關係を示すように思われる。しかし、ローマン主義においては絶對的なもの、神的なものが前提され、直接に信じられ、愛はただ體驗され、感得されるにすぎない。すなわち、愛は無限なるものの感情として人間のなかに沈められてゐるのに反し、シュトルムは愛を絶對的な力にまでたかめ、愛のなかに唯一の神的なものの確證を見ようとする。ローマン主義にとっては宗教は全く本源的なものであり、疑うべからざる確かなものであるが、シュトルムにとっては愛が唯一の經驗された現實なのである。このような愛の絶對化からのみ、神と不滅が缺くべからざる要請となつたにすぎない。

シュトルムの世界観には形而上的基礎が缺けているとよく言われるが、それは彼の思想の純粹此岸性と、特定の宗教的信仰の缺除とによるものである。しかし、彼はその世界観においてもその倫理的行動においても、當時勢力

をえていた唯物主義にも功利主義にもしたがうことなく、どこまでも理想主義者に終始した。

人間は利害を超越して善を爲しうるし、また爲さねばならぬ、というのが彼の信念であった。彼は次のように言っている。「もしも一人の神が存在するならば、それは、われわれの乏しい理解力ではとうてい神をとらえ得ないことを知っていて下さる愛の神でしかありえない。わたしもまた、このような神への信仰心なしに、わたしの内にある一切の惡——すなわち嫉妬、憎惡、猜忌などを克服しようと試み、善良な人間になろうと努力した。」(Gertrud Storm による) また、數多くの許婚への手紙のなかにも、そこにみなぎる心的不安や激情にもかかわらず、はげしい倫理的努力がみられる。人生の目的は、シュトルムにとってさしあたり個人的には、最高の完成と最深の人生享受と考えられたけれども、彼は後年このような自己中心的な考え方を彼の生活態度によっても、また藝術的制作を通じても克服したことを示した。

Frommel はこのような面からシュトルムを次のように評している。「このような道德的理想主義のゆえにシュトルムの文學は、古くから廣く認められているその美的價值を全くはなれても、今後ながく、われわれの有する小説や詩のなかの最もすぐれたものに數えられるであろう。いま藝術的形式をえているものは、わがドイツの情緒生活の最もすぐれた倫理的内容である。情熱の力と輝きにもかかわらずシュトルムは心の奥底において水晶の如く純粹である。……」(O. Frommel: Neuere deutsche Dichter)

シュトルムはすこぶる旺盛な、しかも繊細な道德的感情の持主であつて、道德的命令や社會的因襲にしばられることなく、何時いかなる瞬間にも人間らしさを失わずにいられた。それは人間としての自尊心と、自己責任の意識とに根ざすものである。

彼はその抒情詩や小説が示すように、性愛問題にたいして冷淡ではなかったが、眞の情熱と、意識的な不純な戀愛とのけじめを常には守らずにはおかなかった。彼はおよそ露骨さをきらった。たとえば、シュトルムとしてはきわめて

大膽な戀愛詩である „Mysterium“ を、彼ははじめごく少數の親しい友人にしかみせなかったほどである。

シュトルムは道德性というものを、個人の感情と決意のうえに立つものと考えた。この限りにおいて、それは人格にひとしかった。一方、彼は普遍的拘束力としての道德的秩序の必要を信じていた。そして、社會の傳統的形式を自由主義的風潮による破壊から守ろうと努めた。社會的風習となった形式のもつ神聖さを守ろうとした。

婚姻は彼にとって、家庭の基礎であるばかりでなく、國家ならびにあらゆる社會生活の基礎であり、侵すべからざるものであった。こういう考え方は、一切の法秩序にたいする法律家としての敬意の現われであることは否定できぬが、同時に彼の保守的生活感情の現われでもあった。

要するに、彼の倫理は市民的道德の範圍を出るものでない。そして、その底にキリスト教ならびにドイツ理想主義の感情が流れていることは否定できない。Stuckert の言葉をかりていえば、それは幸福主義的享樂倫理 (eudämonistische Genussethik) もしくは形式主義的義務倫理 (formalistische Pflichtethik) ではなく、責任意識的犠牲倫理 (verantwortungsbewusste Opferehik) である。そして、シュトルムの偉大な點は、彼が理論的に主張し藝術的にも表現した態度を人間としても持ちつづけた點である。

シュトルムは人間の根本道德は眞實性にあると考えた。そして、許婚への手紙のなかでも幾度となくこの問題にふれている。しかも、この眞實性は二つの面をもっている。一つは、すべての秘密、偽り、虚言をゆるさぬ消極的な面であり、いま一つは、どこまでも正直な告白を行う勇氣を要求する積極的な面である。彼はおよそあらゆる虚偽をゆるさなかった。因襲的・社會的虚偽も、宗教的・政治的偽瞞もゆるさなかった。彼は „Für meine Söhne“ という詩を次のような言葉でかき出している。

Hehle nimmer mit der Wahrheit !

Bringt sie Leid, nicht bringt sie Reue;

彼にとって生活の基礎である、このような眞實性をまもるために、彼はいろいろの困難に遭遇した。彼はおのれに對して悔いることのないために、みずから苦しみをひきうけたのである。

またシュートルムは、この世の外面的な富にはあまり價值をおかず、内面的價值によって人生を評價した。それゆえ彼はすべての外的利益追求や、立身出世主義や、空疎な形式主義をにくんだ。彼は「人は、自分の生活している世界を、本質的におのれのなかにもっている」(An Hermione von Preuschen) ことを知っていた。このような内面的思想が彼の全本質を規定し、彼の作品のなかにもあらわれている。たとえば「Für meine Söhne」の最後の一節はそのことを語っている。

Wenn der Pöbel aller Sorte

Tanzt um die goldenen Kälber,

Halte fest: du hast vom Leben

Doch am Ende nur dich selber.

このように、シュートルムの道德的思想および行動は、個人の感情と決意のうえに立つものであるが、それは決してただたんに自己中心的なものでなく、家庭という基礎のうえに立つものであった。というのも、人間の道德生活は、家庭を通じてあたえられる社會秩序のなかくみ入れられてはじめて、具體的内容をもつものであり、また個人の要

求と家庭の秩序とでは、絶対に後者が優先すべきものであるから。また愛情、好意、配慮、信頼というような利他的道徳は、家庭のなかにおいて先ず行われるものであるからである。

またシュトルムの考える家庭なるものは、たんに現に生きている人たちの結びついた世界であるばかりでなく、自分の祖先や子孫までも包含したものであった。遠く過去にさかのぼり、はるか未来にまでも及ぶものであった。彼は小説『Unter dem Tannenbaum』のなかで「わたしはこれら亡き人たちの後継ぎである。彼等自身はすでにいまは亡いが、彼等の好意と力はいまだこの世に残っていて、わたしが迷ったり力足らず思うときには、援助の手をさしのべてくれた…」とかいているが、*„O bleibe treu dem Toten“* という詩のなかでも次のようにうたっている。

Sie starben ; doch sie blieben

Auf Erden wesenlos,

Bis allen ihren Lieben

Der Tod die Augen schloss.

.....

Sie nahen dir in Liebe,

Allein du fühlst es nicht ;

Sie schauen dich an so trübe,

Du aber siehst es nicht.

家庭はその構成員の一人一人にとって、たよるべき支えであると同時に力の源泉でもあった。シュトルムは更に家庭のなかに、人間個人にはゆるぎのない現世における不滅性をみとめた。たとえ、個人の生命は死とともに永遠に消滅して無に歸するとしても、個人が血族のながりつなりのなかの一環であると考えれば、生命の火は子孫によってつぎつぎに受け継がれて、絶えることがないと考えた。こう考えれば、地上における一種の不滅性が保證されるわけである。それゆえ、シュトルムは、自分自身が子供のなかに生き続け、子供たちから忘れられない、ということ望んでやまなかった。個人の存在は、こうすることによってのみ消滅をまぬがれるからである。彼は小説 „Schimmelreiter“ のなかで、主人公ハウケ・ハイエンについて「彼は朝な夕な子供の搖籃のまにに、まるでそこが彼の永遠の幸福の場所であるかのように、ひざまづいた」とかいているが、このことはシュトルム自身にも當てはまる。シュトルムの娘ゲルトルードは「父は自分自身の生活を生きただけでなく、同時にすべての子供の生活を生きた」と言っている。

シュトルムは、眞の人間的理解にもとづく共同生活は、結局家庭生活においてだけ可能であると考えた。コンスタンツェの死後、子供たちにあてた手紙には次のようにかかっている。「こういう場合のいちばんの慰めは、やはり肉身に限る。うちのお母さんに結婚まえの姉妹がいて、代りに家事や家族の面倒をみてくれるのだったら、わたしの生活は随分らくなのだが。わたし自身の考えでは、他人は誰も彼も似たりよったりのものだよ。」

家庭はシュトルムにとって、唯たんに、ほとんど宗教的な嚴肅さをもつ血縁共同體であるばかりでなく、相互扶助の義務を負わされた運命共同體でもあった。この相互扶助の運命共同體は、外界との關係において、はじめてその價值が示されるものである。その外界が、よし冷酷きわまりない自然界にせよ、さまざまの要求、強制、偏見をもつ人間社會にせよ、およそこれら外界の諸力から人間を庇護してくれるものは、ほかならぬ家庭であった。家庭のみが、

これら外界の脅威からわれわれを保護してくれる安静と平和と幸福の場であった。シュトルムの描いた牧歌的、平和的文學は、すべて家庭文學であつたと言ってもさしかえなからう。家庭における平和の世界に對するものは、外界の無気味な醜惡なすがたであつて、これら外界の力が家庭内に侵入してその平和をみだした場合、そこに悲劇が生ずるのだとシュトルムは考えた。

家族 (Familie) と同族 (Sippe) というものは、それに所屬する者たちを時間的に縦に結びあわすのみならず、空間的にも生きた横のつながりを形づくくるものである。家族には代々傳つた家という建物があるように、同族には彼等の發生の地としての都市や地方というものがある。これら二つの關係は、ちょうど一つの植物とその生育した土地や氣候との關係のように、斷ち切りがたい微妙な關係であるとシュトルムは考えた。これは彼自身の體驗にもとづく理論なのである。一八五三年故郷を離れることになつた彼は、住みついた土地から引き離されたために、精神的にも肉體的にも一種のスランプにおちいつたのであつた。たとえば、次の手紙はそれを物語っている。「異郷に來て以來、まるでわたしのうちなる眞の温かい創作力が破壊されたような氣がします。」(An Eduard Morike) 「もしずくと故郷におられたのだしたら、わたしの才能は、内的にも外的にもわたしの幸福の源泉となつていたでしように。」(An die Eltern)

シュトルムのこのような考え方は、自然的・倫理的概念からさらにおし擴げられて、種族と風土 (Stamm und Landschaft) という民族的・政治的概念へと必然的に進んで行く。種族というのは、同じ言語や習俗、同じ思想や感情によつて結ばれて、直接に理解しあえる集團であつて、これが社會的生活形式、社會的秩序、政治的結合をつくりだす。しかし、これらは意識的計畫によるのではなく、政治的意志からつくられるのでもなくて、自然發生的に生ずるものなのである。

シュトルムの國家觀は、まったく種族意識にもとづいていた。國家とは、同じ感情と信頼にもとづく同族結合の發

展したものであった。それは、直接に體驗しうる最高の生活共同體であつて、精神的教養體驗にもとづくものではなかつた。従つて、近代的な法治國家や權力國家の如きものは未だ彼の視野の外にあつた。近代的思想の觀點からすれば、これはまったく非政治的な考え方と言わねばならない。

またシュトルムは、貴族階級にたいして強い嫌惡と反感を抱き、その階級的自負にたいして、攻撃を行わずにはおかなかつたが、これは當時のデモクラティクな風潮や、市民的偏見によるものではなく、ごく自然な社會的正義觀と鞏固な個人的自覺にもとづくものであつた。そして、これは主としてポツダムおよびハイリゲンシュタット時代の彼の體驗に發していた。

しかしながら、このように非政治的な詩人シュトルムが、一八四八年から五〇年にかけてのいわゆるシュレスウィヒ・ホルシュタイン事件に際して、あのように政治的情熱をもえたしたのは何故かという点、それは全く彼の種族の獨立性がおびやかされ、彼自身の存在が脅威にさらされたからであつた。彼個人の生活權のみならず、彼がその出生、生活、仕事を通じて密接に結びついている種族社會全體の生活權がおびやかされたからであつた。一見よわわしい詩人が烈々たる鬪魂をもやす政治的戰士となり „Im Herbst 1850“, „Gräber an der Küste“, „Ein Epilog“, „1. Januar 1851“, 等の政治詩とよばれるべき詩を生みだした。しかし、これらは深い世界觀的基礎のうえに立つものではなくて、一時的な政治的暴風が生みだしたものと云わねばならず、それっきり跡をたち、後年の小説にもその痕跡をとどめていない。そもそも彼の小説は政治問題をとおりあげるのにはふさわしいものではなかつた。こうゆうわけで、シュトルムにおいては、故郷をまもる戰いのためにもえた民族的感情が、さらに國家的感情にまで擴大されることは決してなかつたのである。

シュトルムの文學は、おおむね、いわゆる「狭い壁の間から」(Aus engen Wänden) 生れたものである。彼は

人間としても作家としても、概して家庭という私的な生活圏内、もしくは、郷土という自然發生的な生活圏内にとどまった。彼はたえず變化する時代の社會現象に關心を向けることなく、不變な大地につながる獨自の文學世界を開拓した。彼はこのせまい世界を十分に理解して、作品のなかに描くことによって、時代の流れにあるいは押し流されたかもしれない民族の生活價値をひき留めることが出來た。彼は決して時代の反抗者ではなかったが、彼の生活も創作もいきた世間から一應はなれて立てていたことと、活潑な受容力の排除していたこととは、かえって時代の力に押し流されて自己を見失う危険から、彼を救ったとも言いうるであらう。それゆえ、彼の生活態度は生涯を通じて靜觀的であり、逃避的であつた。初期のそれを過去への逃避とすれば、中期のそれは家庭への逃避であり、後期のそれは自我への逃避と言えないであらうか。このように、彼はたえず自我に立脚し、いよいよ深く内心の聲に耳を傾ける勇氣と決意を見出したゆえに、妨げられることなく成長し、自己を完成することが出來た。彼が小さなもののなかに偉大なものを、限られたもののなかに全體を見たことを忘れてはならないと考える。

「内面ふかく掘り下げるためには、外面の狭さが必要なのです」, *Ich bedarf äusserlich der Enge, um innerlich ins Weite zu gehen* ("Brief an Hermione von Preuschen") という言葉は、けだし彼の人生と文學にたいする關係を要約するものと言いうるであらう。(一九五七・十一・五)

本稿の作成にあたって Insel 版、Meyer 版、Bühl 版、Aufbau 版、Bergland-Buch-Klassiker 版の全集のほかに、次のような文獻を參考にした。なかでも Stuckert に教えられるところが最も多かった。

Franz Stuckert: Theodor Storm. Sein Leben und seine Welt. 1955.

Franz Stuckert: Theodor Storm. Der Dichter in seinem Werk. 1952.

Paul Schütze: Theodor Storm. Sein Leben und seine Dichtung. 1907.

Gertrud Storm: Theodor Storm. Ein Bild seines Lebens. 2 Bde. 1912.

- Alfred Biese: Theodor Storm. Zur Einführung in Welt und Herz des Dichters. 1921.
- Elmer Otto Wooley: Studies in Theodor Storm. 1943.
- Otto Frommel: Neuere deutsche Dichter in ihrer religiösen Stellung. 1902.
- Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft. Schrift. 1. 1952.
- Walther Brecht: Storm und die Geschichte. Deutsche Vierteljahrsschrift. 3. Jahrg. Heft. 3.
- Franz Stuckert: Storms Religiosität. Deutsche Vierteljahrsschrift. 19. Jahrg. Heft. 2.
- Briefwechsel zwischen Theodor Storm und Eduard Mörike. Hrsg. v. H.W. Rath. 1919.
- Bruno Loets: Theodor Storm. Ein rechtes Herz. Sein Leben in Briefen dargestellt. 1951.